慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福澤諭吉特集の刊行について
Sub Title	
Author	石坂, 巖(Ishizaka, Iwao)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1985
Jtitle	近代日本研究 Vol.2, (1985.) ,p.i- ii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤諭吉特集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19850000--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤諭吉特集の刊行について

福澤研究センターは、紀要「近代日本研究」第二号を、ここに生誕一五〇年記念「福澤諭吉特集」として世に送り出すことになった。

福澤諭吉が一八三五年に生まれた以上、一九八五年がその生誕一五〇年目にあたるのは、あたりまえのことでしかない。そのことがすぎさった時間的経過以上に、ある歴史的意味をもちうるとすれば、それはわれわれが生きる今のうちにしかありえないことである。しかし今のわれわれの選択の基準で、彼の選択を直接的に評価するのは、歴史と現在の混同でしかない。他方、福澤の時代における彼の選択が今の選択になるというのは歴史のアナクロニズムでしかない。歴史はつねに一回かぎりなのである。だがこのことは、われわれが、彼の選択から学ぶ（まねるのではなく）ことを許さないというものではないはずである。要は今の時代のわれわれの誠実な選択が、彼の選択の理解を深め、それによってまたわれわれの明日の可能性を、より豊かに拡げる賢さをもつということであろう。

われわれは原理によっては生きず、現世の流れに身をまかせるという国民的伝統をもっている。その点からいえば、福澤は伝統離れであった。一身にして二生を経るが如しというあの彼の内的経験は、彼の歴史的使命の自覚を物語るものであるが、その自覚はあの内的経験を自己の一身にのみとどまらせず、国民一人一人のそれへと拡げることに、彼をかりたてた。そこに著述、演説、新聞発行が学問教育活動として展開され、産業、貿易、財政、外交、教育、宗教、軍事、婦人問題等、社会の各方面の広い領域にわたって、国民への呼びかけが行われる

ことになった。そのさいの彼の基本原理は、言うまでもなく文明の大主義であった。この原理を抜きにして、さまざまな問題についての彼の言動を論じることはできない。よしんばその原理から逸脱した言論があったとしても、その逸脱ということを抜きにしてはその言論の特性をつかむことはできない。

他方、福澤は文明の大主義の現実化の課題を担うことにより、きわめて現実を重視した。時には機会主義的とさえ思えることのあったのは現実に密着しすぎたからである。けれども人事の軽重大小、時処をわきまえるという現実重視の視線は、人間の大知、叡知として、思想的に高められとぎすまされて、現実主義の陥穽におちこむことにはならなかったのである。

福澤の思想、言論の展開が、文明の大主義と現実とのからみあいのなかにあった以上、福澤に接するに多角的な視点は不可欠である。この多角的なアプローチは自づと、彼の生きた時代と社会のさまざまな問題に拡がることになる。そこに近代日本の歴史と課題の一大景観が展望されることになり、今のわれわれの時代の足もとを照らし出すことになる。脚下の照明なくして確な明日への足どりは期待できないのである。

福澤研究センターは発足の始めから、開かれた研究機関であることをめざしてきたが、福澤生誕一五〇年を期して、慶應義塾内外の、むしろ多くは外部の方たちの御協力をえて、右の課題に迫る内容をもった特別号を送り出すことのできたことは何よりの喜びとするところである。

最後に予算をはるかにオーバーしたこの特集号発刊によせられた塾当局の財政的理解には心よりの謝意を表するものである。

一九八五年　晩秋

慶應義塾福澤研究センター

所長　石坂　巖